

阪神間モダニズム未来に

西宮で大学教授ら討議

明治末期から昭和初期にかけて花開いた「阪神間モダニズム」の意義などを検討するセミナーが14日、西宮市の武庫川女子大甲子園会館（旧甲子園ホテル）で開かれた。パネル討議など



阪神間モダニズムを代表する建築・旧甲子園ホテルで開かれたパネル討議
西宮市戸崎町

があり、約200人が聞き入った。

「阪神間モダニズム1900-1940」未来に生かすその精神風土」。兵庫県政150周年を記念し、県と武庫川女子大、学校法人甲南学園が主催した。音楽に合わせた華道のパ

フォーマンスでオープニング。「阪神地域の未来」をテーマに6人が意見交換した。

鹿児島国際大の定藤博子講師は「阪神間モダニズムは、豊かさに裏打ちされた自由さが重要。近江商人の『三方よし』と、『やってみなはれ』の精神が融合されている」と指摘。いけばな小原流の小原宏貴家元は「伝統を守ることも価値があるが、今の社会に合わせることにも必要。新しいことは必ず抵抗があるが、壁を越えるためには言い続けることが重要」と述べた。

関西学院大の角野幸博教授は「海と山に近く、日本と西洋の文化が融合するなど、いろいろな条件がそろって阪神間モダニズムが生まれた。少子高齢化やIT化が進むなど時代の変化の中で、もう一度整理して育て直すことが必要」とまとめた。

(十井秀人)